科目区分　教科及び教科の指導法に関する科目
授業科目名　　国語科教育法４

「国語科教育法４」の授業の検討

国語教育　中西　淳

1. 授業の概要

本授業は、中等の国語科教育の問題点を踏まえた上で、それを改善する授業を構想することのできる力を、さらに、「成長する教師」に必要とされる話し合いの力を育成するところに特徴がある。

本授業の目標及び具体的な到達目標は以下の通りである。

〈目標〉

○国語教育の主要論文・実践や教科書を取り上げながら、国語教育のあり方について考究することができる。

〈具体的な到達目標〉

○他者と協同しながら国語科の授業を構想することができる。

○国語科教育に関する著書や論文を的確に読むことができる。

○国語科教育における問題を把握し、それを改善するための手だてを考えることができる。

これらは、教育学部 DP の以下の二点に該当する。

○自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。（関心・意欲）

○教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。（思考・判断）

2. 授業の展開

授業の展開は以下の通りである。なお、「発表」では、受講生を五つの班に分け、それぞれ二度の発表を行わせた。受講生は教育学部生と法文学部生とを合わせ 22 名である。新型コロナウイルス感染防止には十分配慮した。

第１講　ガイダンスと国語科中等教育教員養成カリキュラム
第２講　国語科教育に関わる問題の立ち上げ
第３講　講義「書くことの学習指導」
第４講　発表①「話すこと・聞くことにおける問題点と改善の手立てについて」
第５講　発表②「書くことの達成感を芽生えさせるために」
第６講　発表③「読むことと書くこととを関連させた授業提案―考えを形成する力の育成を通して―
第７講　発表④「論理的文章において自分の意見をもたせるためには―受容的な読みからの脱却―」
第８講　発表⑤「受験のための古典学習からの脱却」
第９講　発表⑥「聞き手の考えを形成するスピーチの授業提案」
第 10 講　発表⑦「書くことへの意欲を高める意見文指導―身近な題材等を用いて抵抗感を減らす―」
第 11 講　発表⑧「考えを形成する力の育成を目指した授業提案」
第 12 講　発表⑨「論理的文章において自分の意見をもたせるためには」
第 13 講　発表⑩「受験のための古典学習からの脱却―興味を引き出す指導の提案―」
第 14 講　最終発表及び質疑応答
第 15 講　まとめ

3. 授業の工夫点

今回、特に意識した点は以下の通りである。

○受講生による発表テーマの決定

授業当初に「国語科教育の問題」を考えさせた。さらに、発表テーマもそれにもとづいて受講生に決定させた。

○話し合いを深めるための具体的な介入

受講生の質問力は十分であるとはいいがたい。そこで、質問の観点を示したり、質問の例をあげたり、質問の意味を考えさせたりしながら、その力の育成を図った。

○学びの定着を図るための指示と課題

学びの定着を図るために、毎回において、思考力を働かせながら自分の言葉でメモをとるよう指示を出した。さらに、それにもとづく個人レポートの課題を提示した。

４．授業外学習について

発表の準備が、必然的に授業外学習となる。また、授業後に質問を受ける時間を設けた。

５．学びの実態とその成果

授業を検討する観点として、「質問力の育成」と「学びの定着」の二点を用いる。

①　国語教育のあり方を考える質問の生成

授業前半においては質疑応答が低調であったが、次第に、以下のような質問が出されるようになった。それに即して質疑応答の質も向上した。具体的な介入の効果があったものと思われる。

○「話す場を設定することで意欲は高まるのか、話したい話題を持たせることが必要ではないか。」

○「タイトルに『達成感を芽生えさせるために』とあるが、意欲を芽生えさせるために達成感があるのではないか。意欲が目的で、達成感は手段ではないか。」

○「達成感や意欲などのメンタル面の指導だけでなく、技術の指導も大切なのではないか。」

○「文学的文章はすべて虚構なのか、ノンフィクションもあるので、すべてが虚構とは言えないのではないか。」

○「古典の面白みを追求しようとしているが、その必要性は学習者にどのように示すのか、またどのように実感させていくのか。」

○「学習活動に、文章を読み、共感できたところ、納得したところ、わからなかったところを整理するとあるが、共感と納得を分けた理由は何か。」

②　確かな学びの確認

個人レポートにおいて、次のような記述が確認できた。また、そこには、先にあげた指示が生かされていた。

○「この講義を通して、教員になってもよりよい授業を目指して学び続けることが大切だと考えた。これから私たちが生きていくのは、先行きが見通せない時代である。そんな時代を生き抜くためにはどんな言葉の使い手を育てる必要があるのか、どのような授業を目指すべきかを考え続ける必要がある。」

○「最も学ばせたいこと・意識させたいことを教師がはっきり持ち、一つの単元で一貫した意識を持たせる学習ができる授業を作ることが重要である。」

○「従来の古典学習の基本形態で良い部分もあるが、これだけ課題が挙げられている以上、もう少し授業に工夫を加える必要性があると感じた。そのためには、様々な授業方法や展開について触れ、新たな授業スタイルを模索していきながら学習者の目線になって、どうすれば古典の授業に魅力を感じさせることができるのか、どのような力を身に付けさせ、どのように役立てさせるのか、具体的に育てたい学習者の像を描きながら、それに合わせた授業を行っていくことが大切である。」

○「発表を聞いて学んだこと・考えたこととして共通していることは「知識を獲得したとしても、自分のものとして活用できていない」ということであった。どの班も、自分の考えを形成したり、指導を通して達成感や意義を実感させることを目的とした背景には、私たちの世代が受けてきた教育に不足しているものだったのであろう。今回の授業、レポートを通して不足の実感と、改善の手立てをいくつか考えることが出来た。現場で余裕が出来たときに読み返して、知識を活用できる授業実践を行っていきたい。」

○「読むことの授業において文学的文章の方に指導が傾倒しがちであることが問題なのである。子どもたちが社会に出た時にということや、日常生活の中において生きて働く言葉の力とはということを考えた時に、文学的文章の指導ばかりに力を入れていてはいけないことは明らかであろう。」

○「全十回の授業を通して、五つの分野について研究したり議論したりしたことで、これまでになかった発想を得たり実際に授業することを想定して深く考えたりすることができた。教師として現場に出たときに、この授業を通して学んだことをぜひ活用したい。」

○「国語科教育法 4 の講義を受けて、教材分析の重要性や授業づくりにおける様々な工夫、子どもたちに身に付けさせたい力についてなど様々な視点から国語教育を捉えることができた。」

6. まとめ

コロナ禍の授業制限（図書館使用不可、対面授業から遠隔授業への切り替え等）において、十分であるとは言いがたいが、先にあげた〈目標〉は達していると考える。